第３章　考察

調査結果から見える「障害のある方の生涯学習」の現状

弘前大学　教育学部　　准教授　越村　康英

はじめに

誰もが（国民一人一人が）、いつでも（その生涯にわたって）、どこでも（あらゆる機会、あらゆる場所において）学ぶことができる「生涯学習社会」の実現が目指されて久しい。しかし、「障害のある方の生涯学習」については、「教育と福祉の谷間」の問題として見過ごされ、行政施策の面でも立ち遅れているのが現状である。

今回、青森県教育委員会によって「障害のある方の生涯学習に関するアンケート」調査が実施されたことは重要な転機である。800 人もの県民から寄せられた回答（切実な声）を読み解き、「障害のある方の生涯学習」の充実に資する具体的な手立てを早急に講じていくことが期待される。

本稿では、そのための議論の素材となることも意識しながら、学校卒業後に（学校在学中の場合は学校以外で）続けている学習活動や、これから取り組んでみたい学習活動に関する〔問９〕、生涯学習をめぐる状況に関する〔問 12〕への回答に焦点を当て、調査結果から見える「障害のある方の生涯学習」の現状について整理を試みたい。

（調査結果を捉える上で留意しておきたいこと）
＊本調査では、「障害の種類」によって回答数が大きく異なっており「知的障害」が 60.8%を占めている。調査結果を見る際には、このことをふまえておく必要がある。また、「障害の種類」を区分して調査結果を捉えることも重要となる。
＊本調査には「障害の程度」についての設問がなく、程度の軽重が生涯学習に及ぼしている影響までは把握できないという限界がある。
＊調査結果には、障害のある「本人」の回答の他に、「家族や支援者」による回答が 44.9%の割合で含まれている。このことは「本人」だけでなく、身近な人々の現状認識や期待も調査結果に反映されていることを意味する。

１　学校以外で続けている学習活動〔問９〕

（１）学習活動を続けている人の割合

〔問９〕〔問６〕の結果を用いて以下のように計算したところ、学校卒業後に（学校在学中の場合は学校以外で）学習活動を続けている人の割合は 59.6%となった。また、「学校在学中であり、学校以外でも学習活動を続けている人」の割合は 66.1%なのに対し、「学校在学中以外で、学習活動を続けている人」の割合は 55.0%に留まっている。

内閣府「生涯学習に関する世論調査」（令和４年度）によれば、この１年くらいの間に、月１回以上、何らかの学習活動を行った人の割合は 74.8%に上るという計算になる。青森県教育委員会「障害のある方の生涯学習に関するアンケート」調査との単純比較はできないが、この数値の差に、障害のある方が学習活動を行う上での社会的な障壁や困難の大きさが表れているように思われる。

＜計算方法＞

学校以外で学習活動を続けている人	「回答総数（800)」－「問９・無回答（223)」＝577 「577」－「問９・特になし（233)」＝344 「344」÷「577」＝59.6%
学校在学中であり、 学校以外でも学習活動を続けている人	「問６・学校在学中（309)」－「問９・無回答（91)」＝218 「218」－「問９・特になし（74)」＝144 「144」÷「218」＝66.1%
学校在学中以外で、 学習活動を続けている人	「回答総数（800)」－「問６・無回答（30)」＝770 「770」－「問６・学校在学中（309)」＝461 「461」－「問９・無回答（119)」＝342 「342」－「問９・特になし（154)」＝188 「188」÷「342」＝55.0%

（２）続けている学習活動

【障害の種類別】にクロス集計を行ったものが表１である。

いずれの「障害の種類」群においても、20%を超えるのは「健康の維持・増進、スポーツ活動」と「余暇・レクリエーション活動」の２項目のみである。また、「特になし」の比率が高いことも共通しており、知的障害・精神障害では30%を超えている。

表１：続けている学習活動（障害の種類別）　※複数回答

	身体障害等（N＝155）		知的障害（N＝486）		精神障害（N＝136）		発達障害（N＝276）	
	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率
ア.学校で学んだ内容の維持・再学習	26	16.8%	65	13.4%	10	7.4%	48	17.4%
イ.余暇・レクリエーション活動	40	25.8%	112	23.0%	30	22.1%	69	25.0%
ウ.文化芸術活動	8	5.2%	27	5.6%	16	11.8%	20	7.2%
エ.健康の維持・増進、スポーツ活動	43	27.7%	115	23.7%	29	21.3%	70	25.4%
オ.個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習	30	19.4%	71	14.6%	23	16.9%	47	17.0%
カ.社会生活に必要な知識・スキルに関する学習	19	12.3%	67	13.8%	19	14.0%	44	15.9%
キ.仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習	19	12.3%	34	7.0%	12	8.8%	18	6.5%
ク.一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習	15	9.7%	47	9.7%	11	8.1%	30	10.9%
ケ.大学等への進学	1	0.6%	2	0.4%	0	0.0%	2	0.7%
コ.その他	0	0.0%	5	1.0%	0	0.0%	5	1.8%
サ.特になし	36	23.2%	154	31.7%	41	30.1%	66	23.9%
無回答	45	29.0%	130	26.7%	33	24.3%	74	26.8%

＊〔問４〕と〔問９〕（ア～サ）のクロス集計

＊「視覚」「聴覚」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が必要)」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が不要)」「音声・言語・そしゃく機能障害、内部障害」を含めて「身体障害等」として集計した。

次に、【学校在学中】と【学校在学中以外】に分けてクロス集計を行ったものが表２である。

両群で同程度の比率となっている項目も見られるが、「仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習」を除けば、全般的に「学校在学中以

外」群の方が比率は低くなっている。逆に、「特になし」は、「学校在学中」群よりも約 10%高く、33.4%である。

本調査の自由記述欄には、「高校を卒業するとほとんどは施設での生活か家での生活で、どこかで趣味やスポーツを続けるのは難しい」「在学中は、放課後等デイサービスでいろいろな経験ができているので良いと思うが、卒業後の就労等は考えるが、生涯学習となるとなかなかイメージできない」など、学校卒業後に学習活動を行う場・機会がないことを指摘する声がいくつも寄せられている。表２が示す数値にも、こうした厳しい現実が表れている。

表２：続けている学習活動（学校在学中か否か）　※複数回答

	学校在学中（N＝309）		学校在学中以外（N＝461）	
	回答数	比率	回答数	比率
ア.学校で学んだ内容の維持・再学習	71	23.0%	27	5.9%
イ.余暇・レクリエーション活動	69	22.3%	90	19.5%
ウ.文化芸術活動	23	7.4%	25	5.4%
エ.健康の維持・増進、スポーツ活動	72	23.3%	107	23.2%
オ.個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習	54	17.5%	61	13.2%
カ.社会生活に必要な知識・スキルに関する学習	52	16.8%	52	11.3%
キ.仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習	19	6.1%	41	8.9%
ク.一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習	33	10.7%	44	9.5%
ケ.大学等への進学	2	0.6%	3	0.7%
コ.その他	4	1.3%	4	0.9%
サ.特になし	72	23.3%	154	33.4%
無回答	91	29.4%	119	25.8%

＊〔問６〕と〔問９〕（ア～サ）のクロス集計
＊学校在学中の母数（N＝309）は、〔問６〕における「コ.学校在学中」の回答数である。また、学校在学中以外の母数（N＝461）は、〔問６〕に対する総回答数より、「コ.学校在学中」及び「無回答」の数を除いたものである。

２　取り組んでみたい学習活動〔問９〕

【障害の種類別】にクロス集計を行ったものが表３、【学校在学中】と【学校在学中以外】に分けてクロス集計を行ったものが表４である。表３と表１、表４と表２をそれぞれ比較してみると、「続けている学習活動」には留まらない多様な学習ニーズが見えてくる。

（１）障害の種類別の状況

まずは、表３と表１についてである。先述のとおり、「続けている学習活動」で20%を超えているのは、いずれの「障害の種類」群においても同じ２項目であった。他方、「取り組んでみたい学習活動」として 20%を超えているのは、「身体障

害等」群で３項目、「知的障害」群と「精神障害」群で５項目、「発達障害」群では６項目に増えている。「健康の維持・増進、スポーツ活動」や「余暇・レクリエーション活動」を始めたい／継続したいとのニーズが高いと言える。また、「個人の生活」「社会生活」「職業生活」に役立つ学習活動を求める比率も高く、その背後には「少しでも暮らしを安定・充実させたい」という至極当然で切実な願いがあると思われる。こうした切実な願いをきちんと受け止めて、「障害のある方の生涯学習」の推進方策を検討・具体化していくことが肝心である。

さらに、「一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習」を求める人の比率も高く、「文化芸術活動」についても一定のニーズが見られる。これらについては、公民館や博物館・美術館など、地域の社会教育施設としての役割が期待されるところでもあり、「何ができるか」「何をすべきか」を掘り下げ、積極的にチャレンジしていくことが求められる。

表３：取り組んでみたい学習活動（障害の種類別）　※複数回答

	身体障害等（N＝155）		知的障害（N＝486）		精神障害（N＝136）		発達障害（N＝276）	
	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率
シ.学校で学んだ内容の維持・再学習	20	12.9%	60	12.3%	22	16.2%	43	15.6%
ス.余暇・レクリエーション活動	38	24.5%	106	21.8%	22	16.2%	62	22.5%
セ.文化芸術活動	21	13.5%	55	11.3%	17	12.5%	35	12.7%
ソ.健康の維持・増進、スポーツ活動	42	27.1%	132	27.2%	37	27.2%	93	33.7%
タ.個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習	33	21.3%	120	24.7%	37	27.2%	90	32.6%
チ.社会生活に必要な知識・スキルに関する学習	28	18.1%	121	24.9%	33	24.3%	92	33.3%
ツ.仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習	22	14.2%	111	22.8%	45	33.1%	81	29.3%
テ.一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習	30	19.4%	85	17.5%	32	23.5%	65	23.6%
ト.大学等への進学	9	5.8%	24	4.9%	9	6.6%	14	5.1%
ナ.その他	2	1.3%	14	2.9%	6	4.4%	8	2.9%
ニ.特になし	20	12.9%	82	16.9%	20	14.7%	29	10.5%
無回答	49	31.6%	148	30.5%	41	30.1%	68	24.6%

＊〔問４〕と〔問９〕（シ～二）のクロス集計

＊「視覚」「聴覚」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が必要）」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が不要）」「音声・言語・そしゃく機能障害、内部障害」を含めて「身体障害等」として集計した。

（２）学校在学中とそれ以外の状況

表４：取り組んでみたい学習活動（学校在学中か否か）　※複数回答

	学校在学中（N＝309）		学校在学中以外（N＝461）	
	回答数	比率	回答数	比率
シ.学校で学んだ内容の維持・再学習	58	18.8%	38	8.2%
ス.余暇・レクリエーション活動	86	27.8%	71	15.4%
セ.文化芸術活動	45	14.6%	45	9.8%
ソ.健康の維持・増進、スポーツ活動	116	37.5%	85	18.4%
タ.個人の生活に必要な知識・スキルに関する学習	118	38.2%	82	17.8%
チ.社会生活に必要な知識・スキルに関する学習	118	38.2%	78	16.9%
ツ.仕事のスキルアップや資格・免許取得など、職業生活に関わる学習	109	35.3%	84	18.2%
テ.一緒に刺激し合って向上していける仲間づくり、学習意欲を高めてくれる人間関係等に関する学習	83	26.9%	59	12.8%
ト.大学等への進学	23	7.4%	23	5.0%
ナ.その他	7	2.3%	13	2.8%
ニ.特になし	25	8.1%	92	20.0%
無回答	67	21.7%	171	37.1%

＊〔問６〕と〔問９〕（シ～ニ）のクロス集計
＊学校在学中の母数（N＝309）は、〔問６〕における「コ.学校在学中」の回答数である。また、学校在学中以外の母数（N＝461）は、〔問６〕に対する総回答数より、「コ.学校在学中」及び「無回答」の数を除いたものである。

次に、表４と表２についてである。

「学校在学中」群では、「続けている学習活動」として20%を超えているのが３項目であったが、「取り組んでみたい学習活動」では６項目に増えている。なお、６項目中、「健康の維持・増進、スポーツ活動」及び「個人の生活」「社会生活」「職業生活」に役立つ学習活動の４項目は35%以上の比率となっており、かなり高いニーズがある。

「学校在学中以外」群では、「取り組んでみたい学習活動」として20%を超える項目は一つもないが、各項目にわたって一定のニーズが見られる。しかし、「特になし」という回答も20.0%を占めており、学習活動の場・機会、サポートがないことなどに起因するような「あきらめ感」、ある種の強制性を伴う勉強的・訓練的な学習の経験に起因するような「学習への抵抗感」をもつ人も少なくないと推察される。

また、学校在学中か否かに関わらず「大学等への進学」を希望する方も少なくない。このこととも関係して、先進事例に学びながら、「オープンカレッジ」（主に知的障害のある方を対象として、大学が、その学術資源を活かし学習機会を提供する取り組み）の実施や、学校教育法（第58条）に基づく特別支援学校高等部への「専攻科」の設置などについても検討を進めることが必要ではないだろうか。

３　学習活動の形態〔問９〕

先述のとおり、本調査の結果から計算すれば、学校卒業後に（学校在学中の場合は学校以外で）学習活動を続けている人の割合は59.6%となる。では、その人たちは、どのような形態で学習活動を続けているのだろうか。それを、【学校在学中】と【学校在学中以外】に分けてクロス集計したものが表５である。

表５：学習活動の形態（学校在学中か否か）　※複数回答

	学校在学中 (N=235)		学校在学中以外 (N=307)	
	回答数	比率	回答数	比率
ア.書籍やテキスト	31	13.2%	41	13.4%
イ.テレビやラジオ	54	23.0%	80	26.1%
ウ.インターネット	74	31.5%	75	24.4%
エ.自分の学校や同窓会等が主催する学びの場	42	17.9%	22	7.2%
オ.同好者が自主的に行っている集まり、サークル活動	17	7.2%	20	6.5%
カ.職場の教育、研修	5	2.1%	39	12.7%
キ.障害福祉サービス事業所等の講座、余暇活動	41	17.4%	62	20.2%
ク.公民館や生涯学習センターなどの公的な機関における講座や教室	4	1.7%	14	4.6%
ケ.その他	11	4.7%	10	3.3%
コ.特になし	4	1.7%	13	4.2%
無回答	8	3.4%	7	2.3%

＊〔設問６〕と〔設問11〕のクロス集計
＊「学校在学中」(N＝309) 及び「学校在学中以外」(N＝461) のうち、それぞれ〔設問９〕において「サ.特になし」以外を選択した人の回答を集計した。

「学校在学中」群では、「インターネット」の比率が最も高く31.5%、次いで「テレビやラジオ」が23.0%という結果である。「学校在学中以外」群でも、順位は逆転するが、「テレビやラジオ」が26.1%、「インターネット」が24.4%と上位である。また、学校在学中か否かにかかわらず、「書籍やテキスト」も一定の比率となっている。本調査の自由記述欄に「今はiPadでユーチューブを見るぐらいです」のような記載が複数あるように、テレビやラジオの情報系番組や学習系YouTubeなどを視聴したり、本を読んだりしながら学習するという形態が中心になっていると推察される。このような学習形態を否定するものではないが、それらを積極的に選択しているというよりは、そうせざるを得ない孤立した学習状況が広がっているのではないだろうか。

他方、他者と共に学び合える機会として、「学校在学中」群では「自分の学校や同窓会等が主催する学びの場」が17.7%、放課後等デイサービスなどの「障害福祉サービス事業所等の講座、余暇活動」が17.3%となっている。また、「学校在学中以外」群でも、「障害福祉サービス事業所等の講座、余暇活動」の比率は20.2%と高く、重要な機会となっているものと思われる。しかし、それ以外の選択が可能な人は限られており、「公民館や生涯学習センターなどの公的な機関における講座や教室」で学習している人は、「学校在学中」群では1.7%、「学校在学中以外」群でも4.6%と少

ない。また、「同好者が自主的に行っている集まり、サークル活動」に参加して学習している人は、いずれの群においても７％前後にとどまっている。

４　生涯学習をめぐる状況認識－障害の種類別〔質問 12〕

学習活動に影響する①～⑫の事柄への認識について、【障害の種類別】にクロス集計したものが表６である。

表６：生涯学習をめぐる状況認識（障害の種類別）

	身体障害等 (N＝155)		知的障害 (N＝486)		精神障害 (N＝136)		発達障害 (N＝276)	
	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率	回答数	比率
①生涯学習に関する情報がある	38	24.5%	126	25.9%	40	29.4%	85	30.8%
②生涯学習の機会がある	33	21.3%	120	24.7%	37	27.2%	77	27.9%
③生涯学習への参加を物理的に妨げる要因がある	72	46.5%	123	25.3%	27	19.9%	65	23.6%
④学びたいと思ったときに相談する人がいる	65	41.9%	263	54.1%	69	50.7%	136	49.3%
⑤生涯学習をサポートする仕組みがある	34	21.9%	140	28.8%	40	29.4%	77	27.9%
⑥学ぼうとする障害者に対する社会の理解がある	46	29.7%	171	35.2%	59	43.4%	89	32.2%
⑦学ぶ場に出かけていこうとする気持ちがある	78	50.3%	210	43.2%	58	42.6%	129	46.7%
⑧生涯学習に充てる時間がある	75	48.4%	247	50.8%	69	50.7%	148	53.6%
⑨一緒に学習する友人、仲間がいる	30	19.4%	143	29.4%	34	25.0%	83	30.1%
⑩生涯学習にかかる費用が負担になっている	36	23.2%	112	23.0%	48	35.3%	84	30.4%
⑪外出すること自体に困難を感じる	72	46.5%	146	30.0%	52	38.2%	89	32.2%
⑫学びたいという意欲がある	88	56.8%	248	51.0%	72	52.9%	154	55.8%

＊〔問４〕と〔問 12〕のクロス集計
＊「視覚」「聴覚」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が必要)」「肢体不自由（車椅子、ストレッチャー等が不要)」「音声・言語・そしゃく機能障害、内部障害」を含めて「身体障害等」として集計した。
＊①②③⑤⑥⑦⑧⑫に該当する回答数は、「とてもある」「ある」の合計
④⑨に該当する回答数は、「たくさんいる」「いる」の合計
⑩に該当する回答数は、「とてもなっている」「なっている」の合計
⑪に該当する回答数は、「とても感じる」「感じる」の合計

（１）生涯学習に関する情報と機会〔①・②〕

いずれの「障害の種類」群でも同じように、情報や機会が「ある」と感じている人は 20～30％程度と少ない。また、いずれの「障害の種類」群においても、僅差であるが、情報よりも機会の方が「ある」と感じている人の比率は低くなっている。

本調査の自由記述欄には、「学習意欲はあるが、イベントとかお知らせ等を耳にする機会がないのが現状」「もっと学びの場や、交流の場、情報などが豊富であってほしい」「学びたい事があり、情報が入ってきても、それに対する学びの場が少なく受け入れて頂けない」「障害者だけの習い事、サークルが少ない」などの声が

いくつも寄せられているように、障害がある方の70%以上が、生涯学習に関する情報も機会も「ない」と感じている。

（２）参加を物理的に妨げる要因／学ぶ場に出かけていこうとする気持ち／外出に対する困難〔③・⑦・⑪〕

「生涯学習への参加を物理的に妨げる要因がある」「外出すること自体に困難を感じる」という比率が最も高いのは「身体障害等」群であり、いずれも46.5%である。背景に、建物や交通機関などの「物理的な障壁」があることは言うまでもなく、それらを取り除いていくための努力や移動支援の充実が必要である。

また、「身体障害等」以外の３つの群においても、外出に対する困難を感じている比率は30%を超えており、決して低いわけではない。「物理的な障壁」のみならず、障害があることを理由に資格を制限されるような「制度的な障壁」、点字・音声案内や手話通訳・要約筆記などが不足しているというような「情報面の障壁」を無くしていくことも重要である。さらには、本調査の自由記述欄に「健常者の人に理解してもらえるか不安で一歩を踏み出せない」「周りの目が気になって公園に行けませんでした」「学ぼうとする障害者に社会の理解はほぼない」などの声が寄せられているように、障害のある方を偏見の目で見たり、哀れんだりするような「意識上の障壁」が根深く存在していることにも目を向けていく必要がある。たとえば、公民館の事業（主催講座）として、障害に関する正確な「知識」を獲得し、障害のある方との「かかわり」を通じて障害理解を深めていけるような学習機会を積極的につくり出していくことも、「学ぼうとする障害者に対する社会の理解」を広げるためには大切な手立てとなるだろう。

障害のある方の「学ぶ場に出ていこうとする気持ち」を後押ししていくためにも、こうした「物理的な障壁」「制度的な障壁」「情報面の障壁」「意識上の障壁」を着実に取り払っていかなければならない。

５　生涯学習をめぐる状況認識－学校在学中か否か〔質問12〕

次に、学習活動に影響する①～⑫の事柄への認識について、【学校在学中】と【学校在学中以外】に分けてクロス集計を行ったものが表７である。両群を比較してみると、「⑦学ぶ場に出かけていこうとする気持ちがある」「⑧生涯学習に充てる時間がある」「⑨一緒に学習する友人、仲間がいる」「⑫学びたいという意欲がある」という事柄への認識に大きな違いが見られる。

表７：生涯学習をめぐる状況認識（学校在学中か否か）

	学校在学中（N＝309）		学校在学中以外（N＝461）	
	回答数	比率	回答数	比率
①生涯学習に関する情報がある	86	27.8%	125	27.1%
②生涯学習の機会がある	85	27.5%	112	24.3%
③生涯学習への参加を物理的に妨げる要因がある	82	26.5%	101	21.9%
④学びたいと思ったときに相談する人がいる	156	50.5%	227	49.2%
⑤生涯学習をサポートする仕組みがある	94	30.4%	120	26.0%
⑥学ぼうとする障害者に対する社会の理解がある	108	35.0%	174	37.7%
⑦学ぶ場に出かけていこうとする気持ちがある	155	50.2%	181	39.3%
⑧生涯学習に充てる時間がある	179	57.9%	196	42.5%
⑨一緒に学習する友人、仲間がいる	109	35.3%	118	25.6%
⑩生涯学習にかかる費用が負担になっている	98	31.7%	112	24.3%
⑪外出すること自体に困難を感じる	98	31.7%	129	28.0%
⑫学びたいという意欲がある	190	61.5%	210	45.6%

＊〔問６〕と〔問 12〕のクロス集計
＊学校在学中の母数（N＝309）は、日中の主な活動に関する〔質問６〕における「コ.学校在学中」の回答数である。学校在学中以外の母数（N＝461）は、〔問６〕に対する総回答数より、「コ.学校在学中」及び「無回答」の数を除いたものである。
＊①②③⑤⑥⑦⑧⑫に該当する回答数は、「とてもある」「ある」の合計
④⑨に該当する回答数は、「たくさんいる」「いる」の合計
⑩に該当する回答数は、「とてもなっている」「なっている」の合計
⑪に該当する回答数は、「とても感じる」「感じる」の合計

（１）学ぶ場に出かけていこうとする気持ち／学びたいという意欲〔⑦・⑫〕

「⑦学ぶ場に出かけていこうとする気持ちがある」という比率は、「学校在学中」群では 50.2%であるのに対し、「学校在学中以外」群では 39.3%となっており、後者の方が 10.9%低い。「⑫学びたいという意欲がある」という比率についても同様で、「学校在学中」群は 61.5%、「学校在学中以外」群では 45.6%と、15.9%の差が出ている。表４において、「取り組んでみたい学習活動」が「特になし」という比率が、「学校在学中」群で 8.1%であるのに対し、「学校在学中以外」群では 20.0%という結果となっていることとも共通していると考えられる。

先にも述べたように、「学校在学中以外」群には、年齢を重ねる過程で様々なことを経験し、厳しい現実も目の当たりにするなかで、「あきらめ感」や「学習への抵抗感」を抱く人が多いとも言えるのではないだろうか。また、加齢に伴う心身の変化や障害の重度化のほか、「学校在学中」群よりも生涯学習に充てる時間が「ない」という人の割合が高いことなども関係しているものと思われる。

生涯学習は、決して強制されるものではなく、みずからの自発的意思によって行うことを基本とするものである。当然、「学習活動を行いたくない」「学習活動は行わない」という意思や判断も尊重されるべきである。しかし、「あきらめ感」

などから学習への欲求が抑え込まれた状態の人もいるとすれば、その人自身がみずからの学習欲求を掘り起こしていけるような伴走的支援も大切になってくるだろう。

（２）相談できる人〔④〕

いずれの群においても、約半数の人が「学びたいと思ったときに相談する人がいる」と回答している。この比率を高いと見るか否かは一概に判断することはできないが、相談できる人が身近にいることは重要である。

家族はもとより、特別支援学校の教師、障害福祉サービス事業所や福祉行政の専門職員などが主な相談相手となっているのではないだろうか。そうであれば、これらの人が、生涯学習に関する情報を幅広く入手・共有できるような体制や仕組みを整えていくことも大切である。

また、５－（１）に述べたことと関連して、特別支援学校の教師や福祉の専門職員には、専門性を活かし、障害のある方が自らの学習欲求を掘り起こしていけるような伴走的支援にも、意識的に取り組んでいくことが求められるのではないだろうか。

（３）一緒に学習する友人、仲間〔⑨〕

本調査の自由記述欄には、「学校を卒業すると楽しめる仲間や社会との関わりが少なくなり心配です。働く場所以外にも、友人や楽しめる、継続的に通える、人生を豊かに生きがいを感じられる所や機会がほしいです」「家で一人で黙々と学習するより、他者とのコミュニケーションや、教えていただく喜びを味わえたらと思います」との声が寄せられている。これらの願いの切実さを示すように、「⑨一緒に学習する友人、仲間がいる」という人の比率は、「学校在学中」群でも 35.3%に留まっており、「学校在学中以外」群では 25.6%と約 10%も低くなっている。

他者と共に学ぶこと、学ぶことを通じて他者や地域とのつながりを広げる／深めることは、生涯学習の醍醐味の一つである。障害を理由に制約を受けず、誰もがその醍醐味を味わえるような学習の場・機会とはどのようなものかを模索し、身近な地域において実現していくことが喫緊の課題である。

同じく自由記述欄には、「障害がある、ないに関わらず、皆が同じように何かを学び、共に生きるような世の中になってほしい」「健常者も障害者（知的もふくめて）もすべての人が、地域でいっしょに学習・活動できるようにしてほしい」との意見がある一方、「健常者と一緒の席はやはり無理があると思う…。同じような境遇の仲間達と励ましあって人生を乗りこえていってほしい」との意見も出されている。どちらが正しいということではなく、障害のある方の生涯学習の場・機会の在り方を考えていく上で、「一緒に学習する友人、仲間」の存在をどのように捉えるのかも重要な論点となるだろう。

おわりに

障害者権利条約への批准（2014 年）が、国や地方公共団体における「障害者の生涯学習」に関する政策的な取り組みを促す主要な契機となっている。それは、青森県においても同様である。

それでは、おわりに、条約（第 24 条・第 1 項）を確認しておきたい。

> 第 24 条　教育
>
> 1　締約国は、教育についての障害者の権利を認める。締約国は、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等として実現するため、障害者を包容するあらゆる段階の教育制度及び生涯学習を確保する。当該教育制度及び生涯学習は、次のことを目的とする。
>
> (a) 人間の潜在能力並びに尊厳及び自己の価値についての意識を十分に発達させ、並びに人権、基本的自由及び人間の多様性の尊重を強化すること。
>
> (b) 障害者が、その人格、才能及び想像力並びに精神的及び身体的な能力をその可能な最大限度まで発揮させること。
>
> (c) 障害者が自由な社会に効果的に参加することを可能とすること。

青森県では、教育長からの諮問を受け、第 16 期生涯学習審議会において「障害者の生涯学習の振興方策について」の議論が進められているところである。今回の調査結果を手がかりとしながら、まずは「障害のある方の生涯学習」をめぐる現状を正確に把握していくことが重要である。そして、条約（第 24 条）にも示されているように、「教育についての障害者の権利」（生涯にわたる学習権）を基軸に据え、障害のある方が、生涯学習を通じて自ら能力や可能性を開花させ、広く社会に参加していくことを支えられるような、建設的・具体的な方策を打ち出せるのかが問われている。